

住民自主活動グループのネットワークと活動拠点づくり

～やきもの産地の試みをめぐって～

A Study on Network and Activity Place of Local Resident's Self Activity Group

～In Case of Ceramic Industry Area～

玉井 明子*, 久 隆浩**

Akiko TAMAI *, Takahiro HISA**

1. はじめに

地方分権の動きが強まる中、市政への住民参加が重要視される一方で、住民がまちの良さを再認識し自主的に取り組むボランティア活動が多くみられるようになった。常滑市の場合、中部国際空港の建設を間近に迎えると共に失われつつある郷土の歴史的な文化を住民主導で保存し活用する任意の組織が芽生え活動している。徐々に組織形態を変えつつ様々な方法・手段を駆使して具体化されてきている。中でも、地域の文化・芸術をテーマとした活動拠点(HUB)づくりは、住民活動を日常的な取組みとして実現させ、さらに地域内外との交流(ネットワーク)の輪を広げている。

本稿では、やきもの産地で有名な常滑市を事例に地域の内外を結ぶ“HUB”として機能している2つの活動拠点とその設立に関わった住民(自主的活動グループ)に焦点をあて研究を行う。

具体的に2章では活動拠点(HUB)となる“場”の特徴について述べる。一般に利潤を目的とした商業用店舗ではなく地域の文化を“伝える・活動する・交流する場”として常滑市には、店舗(ギャラリー)の存在がある。ここでは、その活動拠点として顕著な“共栄窯”“常滑屋”の特徴について“演出”と“役割”の観点から整理した。

3章では、人的ネットワークの形成プロセスについて述べる。活動拠点づくりには様々な人との出会いや交流のもと、そこで形成された人的ネットワークによって成し遂げられる。ここでは、“共栄窯”“常滑屋”

の設立に携わった方々、特に核となる人物を中心に、どのような場でどのようにしてノウハウを得、人々のネットワークを形成し拠点づくりに至ったのか、について調査・分析した。以上の内容を明らかにすることによって、住民主導型まちづくりの促進に向け、自治体が住民活動に対しどのように対応し支援していくべきか、そして公共施設へのソフト面のあり方へのヒントが得られるのではないかと考える。調査方法として、常滑市の住民活動に関する内容については新聞記事やパンフレット、広報、ホームページなどの資料・情報端末により調査し、活動内容やプロセスについてはそれに関わった方々(住民の自主的活動グループのメンバー)に直接インタビュー調査を行った。

2. 住民が創り上げる活動拠点(HUB)の特徴

(1)「共栄窯」の特徴

景観保全と時代のニーズに合わせた演出

大正期に建てられた大窯のある製陶工場の倉庫を改装し、古い伝統と新しいモダンなイメージを融合させた建物になっている。内部は大窯を中央に構えたギャラリーとフリースペースがあり、間接照明と建物補強用鉄骨が作家作品(創作やきもの)の雰囲気と相まって“おしゃれな・高級感のある”空間を演出している。

“芸術的創作と作家活動”をコンセプトとしたHUBとしての役割

ギャラリーは、国内や海外からの若手陶芸作家(現在200名)が活動できる拠点(個展・グループ展・展示即売)として消費者と作家をつなぐコネクターとなっている。別棟には、貸し工房があり地元作家による“プロ養成講座・陶芸教室”が行われ、若手陶芸作家に対しては“育成の場”として一般客へは“体験の場”として機能している。年2回、消費者と作家そして住

キーワード：住民主体のまちづくり、人的ネットワーク

* 正会員 近畿大学大学院研究生 土木工学専攻

**正会員 工博 近畿大学理工学部土木工学科

(東大阪市小若江 3-4-1 Tel:06-6721-2332・Fax:06-6730-1320)

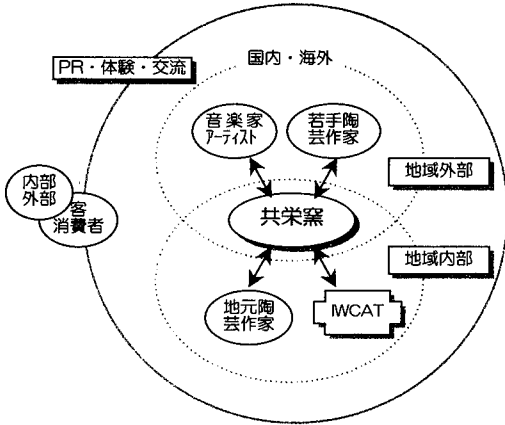


図-1 共栄窯の機能とネットワーク

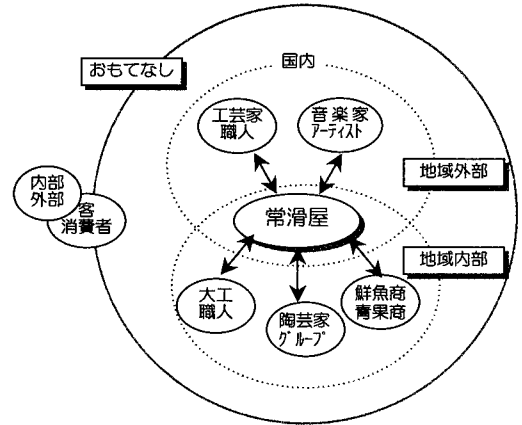


図-2 常滑屋の機能とネットワーク

民との交流の場として屋外・屋内（大窯内部）を活用したイベント（ミニコンサートやお食事会）が行われている。このように“共栄窯”は“やきもの”を中心とした活動・交流の場であり、国内外を問わず言葉の壁を越えて人々の交流の輪を広げる“HUB”としての機能を持っていることが判る（図-1）。

(2) 「常滑屋」の特徴

常滑ならではの文化を伝える“おもてなし”の演出

大正時代の土管工場を改装した内部には、喫茶・ギャラリー・多目的スペースがある。喫茶内は、地元の生活雑貨を再利用し民芸調に装飾されている。バックミュージックに“笛の音（地元音楽家による自作のやきもの笛）”が心地よく流れる中、地元で採れた新鮮な食材によるこだわりの料理を常滑焼の器で食べる。

ギャラリーでは陶芸職人グループ（陶の人：16名）が常設で展示即売され、多目的スペースはイベント（個展や工芸教室、ミニコンサート）が定期的に行われる。

このように常に変化のある心暖かい“おもてなし”に、来客の「また来ます」という声が絶えない。

“民芸的文化と職人活動”をコンセプトにしたHUBとしての役割

ギャラリーは、地域内外やきものを問わず、染織家・木工職人・陶芸職人や音楽家の活動の場であり、消費者と工芸家・職人をつなぐコネクターとして機能している。また、こだわりの食材を通じてこだわりをもった地元の鮮魚商・青果商との連携を図り、らしさの演出は、地元大工職人との連携を図っている。地域内外

から訪れる観光客（消費者）に対して郷土の歴史民衆文化（民芸）を多角的に五感で伝える。このように“常滑屋”は職人の活動・文化交流の場であり“HUB”として機能していることが判る（図-2）。

3. 活動拠点づくりのプロセスと人的ネットワーク

①活動のきっかけとしてのグループ間交流

昭和62年度、“親子劇場”に所属していた主婦S氏は、“サークル協議会”に所属していた製陶業兼音楽家W氏の活動グループに協賛することで常滑の春まつりのシンボル“陶製の山車・子供のお囃子”を製作することになった（図-4）。この取組みで、若者達の郷土を思う姿に感動した主婦S氏は、同時期に開催された公民館活動の市民講座“地域をみつめて”に出席する。やきもの職人が育んできた郷土歴史文化の大切さ儚さをしみじみと感じ、「何とか広く住民に伝えたい」と考えた。そこで主婦S氏は、市民講座の修了生（平均年齢60代・20名）を中心とした自主グループ「常滑郷土文化会つちのこ」を結成することになる。月2回の活動（勉強会・講演会・見学会）を行い、機関紙の定期発行・郷土写真展の開催など、歴史文化をテーマに年配者が活動できる“場”をつくり指揮していった。こういった取組みに平行しながらも主婦S氏は、「町づくりを考える常栄会」などへ入会。地域の様々な団体メンバーと交流を深め活動ノウハウを学んでいった。

②やきもの散歩道フェスティバルでの取組み

昭和63年度、JCに所属していた酒造業S氏の企画

で住民に常滑の良さを再認識してもらうきっかけづくりとして「JC25周年記念シンポジウム・イベント」が行われた。JCを中心とする「やきもの散歩道フェスティバル実行委員会」が発足。常滑市の観光拠点である“やきもの散歩道”を会場として“やきもの散歩道フェスティバル”（秋祭りとして定着）が開催された。実行委員会の働きかけでW氏と主婦S氏、主婦I氏が参画。意気投合した酒造業S氏と主婦S氏は共同で活動するきっかけに繋がった。

③イベントグループ「常滑全席倶楽部」の結成

平成2年度には、主婦S氏・酒造業S氏の共同企画で、他10名（I氏・W氏 etc）をメンバーとする「常滑全席倶楽部」が結成された。“酒蔵”を舞台に、常滑の素材（地の新鮮な産物・作家の器）を用いて文化を伝えるイベントを計2回開催することになった。1回目は「お笑い大吟醸」という落語を取り入れたイベント。2回目は手作りの電球饅頭を手土産に、大手電気

会社会長（常滑出身）の話を書く「講演会」を開催。同時に主婦S氏・酒造業S氏・W氏によるパネルディスカッション“町づくりの現状とこれからの考える”が行われた。このような遊び感覚を取り入れたイベントは聴衆を感激させた。「面白かった」「また楽しみにしています」といった喜びの声や顔を見ることで「またやろう」という企画側の意気込みが強まっていった。

そういった活動の一方で、古い製陶所や煙突が次々に取り壊されていく現状を目の当たりにし「何とかして常滑らしい場所が残せないか」「常滑の住民として今何かをやりたい」と考えるようになった。しかし、イベントで伝えることは一時的なものでしかない。日常的な活動として、また人の輪を広げる“場”（拠点）がつかれないかと模索していた。

④平成5年「共栄窯」の設立

平成3年頃、IWCAT^{註1)}を通じて常滑には全国世界各地から訪れてくる若手陶芸作家が多かった。しかし、

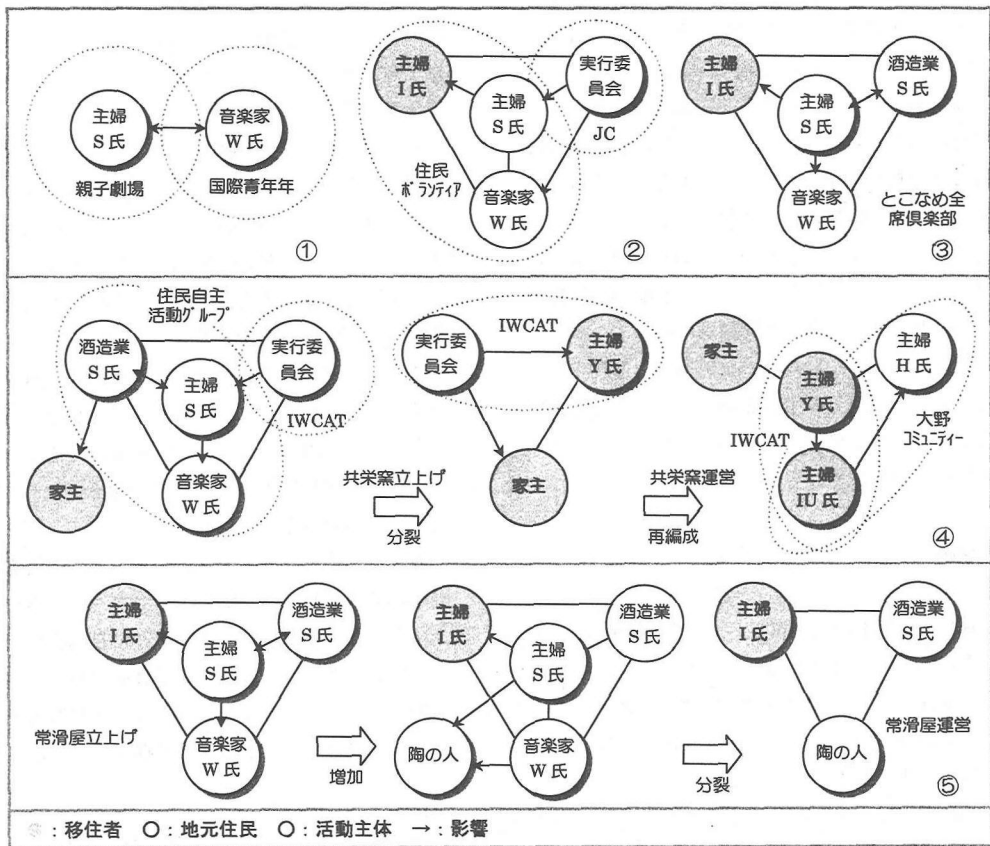


図-4. 人的ネットワークの形成過程

外部からの作家に対する“活動の場”が無いに等しかった。それに気づいたIWCATの委員は主婦S氏に働きかける。両者のタイミングが一致したことで、酒造業S氏とW氏がこれに参画。既存景観を保全し歴史的文化をも継承できる方法“空工場・倉庫の活用”を提案した。利用者のアクセス性を考慮し常滑駅近隣の古いやきもの倉庫“共栄窯”に決定。酒造業S氏が家主に働きかけることでグループが形成された。しかし、計画の進行過程で目標の不一致(価値観の相違)が生じ、グループが分裂することになる。結局“共栄窯”は、IWCATの委員と家主、主婦Y氏によって、IWCATの目指す拠点づくりに向けて計画が進行していった。IWCATに所属していたY氏の呼びかけで主婦IU氏が加わり、IU氏の所属する大野コミュニティー^{註2)}のメンバーH氏の計3名の主婦によって運営されるようになった。

⑤平成7年「常滑屋」の設立

平成6年頃、“やきもの散歩道”には観光客への休憩所がなかった。そこで観光客や労働者、住民がちよっと足を止めてくつろげる“場”をつくろうと主婦S氏・酒造業S氏・W氏・I氏の4人は、第2の拠点づくりに取り組んだ。やきもの散歩道沿道にある古い土管工場を改修し、4人が共に知恵を絞り行動し協同出資することで喫茶・ギャラリー“常滑屋”は実現した。

開店後、珍しい試みとして注目を集めマスコミに取り上げられる。また「面白い店がある」と口コミが広がり県外から訪れる客も増加。これを皮切りに散歩道沿道等で空き家を利用した店舗が増加していった。しかし日常的活動の中で4人の価値観の相違が生じ、ここでもグループが分裂することになる。そこで、以前から喫茶を担当していた主婦I氏、そして酒造業S氏が常滑屋を運営していくことになった。

4. 結論

本稿では、活動拠点(HUB)としての店舗(ギャラリー)を対象とし、住民が創り上げる“場”の特徴について、住民による自主的活動プロセスとネットワークづくりに焦点をあて明らかにしてきた。特徴を考察すると以下のようにまとめられる。

①活動拠点づくりの特徴は、“外部から来る若手陶芸家の活動拠点の問題”“観光ルート内に休憩所がない問題”など、常滑を訪問する人や常滑という場所で活

動したい人への“器づくり”がきっかけとなっている。

ここでの取組みの特徴は、時代のニーズを的確に読み取り実践したこと(ソフトからの拠点づくり)、壊される運命にあった古い土管工場を活用したこと(景観保全)、そして時代にあった使われ方や演出(古いものと新しいものを融合させた内装ディスプレイ)、運営を担う主婦の方々によるソフト面の充実等が挙げられる。これが、ユーザーや訪問客の増加を招き、住民の意識を変えるとともに、空き家・空工場を活用した店舗の増加につながった。

②人的ネットワークの広がりや活動ノウハウについて活動の担い手に共通する点は、家主意外は皆、団体・組織に所属しているということである。特に活動の核となっている主婦S氏に関しては、友人に誘われたことがきっかけで所属した団体活動の中、モノづくりを通じて他団体と交流する機会を得た。こういった交流が輪を広げるきっかけに結びつき、様々な団体に所属することで、企画力や活動のノウハウを学ぶことに繋がった。また、活動を促すエネルギー源として訪問客による「また来ます」「楽しみにしています」という言葉・触れ合いがあることが見逃せない。

③拠点づくり(日常的取組み)となると価値観という難関が立ち足はだかる。ここでは計画推進段階と運営においてグループの分裂がみられた。しかしここで注目すべきは、この分裂が活動の破局を意味するのではなく“場”を移譲することで運営の担い手ならではの力を発揮していることである。また、主婦の中に外部から移り住んで来た方々が存在し必然的に運営を担っていることに気づく。これは推測の域を出ないが、外部の者ならではの持つ視点から常滑を捉える感覚と外部との接点がすでにありそれを活かせる場であったと捉えることもできる。

以上、人的ネットワークはグループ間交流を通して輪が広がり、共同の活動の中でノウハウを得それが拠点づくりにまで至った。このように自己を活かすきっかけはどこにでもある。ただそれを気づくか気づかないかであり、常滑の場合それを気づかせてくれる“場”として“共栄窯”“常滑屋”の存在は大きな意味を持っている。

<補注>

- 1：昭和60年「とこなめ国際やきものホームステイ実行委員会」が発足。平成9年度には12ヶ国、20名の参加者となる。
- 2：昭和63年度に常滑市主導で「大野コミュニティー」が結成された。現在は住民主導で取り組まれている